日本軍政下のインドネシアにおける 日本文学作品翻訳の一考察

—— 雑誌『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』を中心として

Antonius R. Pujo PURNOMO (アントニウス・プジョ・ブルノモ : Associate Professor, Department of Japanese Studies, Faculty of Humanities, Universitas Airlangga)
✉ antonius-r-p-p@fib.unair.ac.id

(インドネシア) アイルランガ大学人文学部日本研究学科准教授。日本思想史、近代日本文学。『日本児童文学選集』(スラバヤ : エラメディア, 2009)、『君に届けたい① 日本詩、散文、戯曲選集』(スラバヤ : エラメディア, 2014)、「神保光太郎の『南方詩集』における作家の展望と真相」(『跨境/日本語文学研究』第7号、高麗大学校GLOBAL日本研究院 2018)、『Matahari Khatulistiwa : Sejarah Hubungan Indonesia- Jepang dalam Perspektif Sastra dan Sosial Budaya』(編集者・インドネシア語 : 赤道の太陽—文学社会文化の見解から見たインドネシアと日本の関係史、スラバヤ : Airlangga University Press, 2019)、『Japanese Studies in Indonesia』(New Frontiers in Japanese Studies, London : Routledge, 2020) 等。

A Study of Indonesian Translations of Japanese Literary Works during the Japanese Military Occupation : Focusing on the Role of the Magazines *Pandji Poestaka* and *Djawa Baroe*

The purpose of this thesis is to discuss the characteristics of Indonesian translations of Japanese literary works which were published in the magazines *Pandji Poestaka* and *Djawa Baroe* during the Japanese occupation of Indonesia (1942-1945). Moreover, it also examines Indonesians' perceptions of these literary translations at that time. The study shows that attention to detail was lacking in the translation process because of the restrictions in place during the period of emergency of the military administration and the limited space available in these magazines. However, none of this diminishes the essence of the stories that were translated. Although they contained a lot of propagandistic elements that were insisted upon by the Japanese military government, the most important factor in determining the final form in which they were published was the role of their translators and editors. Since the magazine was published in two languages, readers from both Japan and Indonesia each gained new knowledge about and experiences of the culture and thinking of the other through the literary works that were translated. Ultimately these works were a medium of cultural exchange between the two nations during the war.

Keywords Cultural Exchange(異文化交流), Indonesian Language(インドネシア語), Propaganda(プロパガンダ), Translation Method(翻訳方法), Pacific War(太平洋戦争)

1 はじめに

植民地主義のもとでの文化的な支配・被支配が、言語という壁に直面しなければならないという事実は否定できない。そして、その異なる言語と文化を理解するには、必然的に「翻訳」という作業が大切なカギとなることは周知のようである。植民地主義と翻訳の関係について、ニランジャナは「実践としての翻訳は、植民地主義のもとで機能する非対称的な権力関係を形づくるとともに、その関係の中で自らを形づくっていく」と述べている¹。つまり、この場合、支配者(日本)と被支配者(インドネシア)の関係に見られるように、日本語をインドネシア語に翻訳するという過程において、支配者の権力は、被支配者の言葉を通じて、認めてもらうということが自然と作られた。同時に、被支配者の言葉を支配者の言葉に翻訳する過程で、相手の権力を認めるという意味が読み取れる。1942年から1945年まで、日本が蘭領東印度(インドネシア)を侵略したときに、軍政の目的を達成するために様々な翻訳活動が行われた。その中で、日本文学作品を翻訳し、新聞および雑誌に掲載したのである。

インドネシアの報道史において、1920年代に入って様々な雑誌が発行された。その中で、『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』の存在が重要であることが否定できない。特に、1942年~1945年の日本軍政下のインドネシアにおいて、両誌が大切な役割を担っていた。前者は、蘭領東印度時代の1922年に初めて出版された一般雑誌であり、日本占領下の時代に入ってから、プロパガンダという一つの目的に注力するため、再出版されたのである。他方、後者は、日本軍政の宣伝部が設立した新しい一般向けの雑誌である。後者の興味深い特徴は二重語(インドネシア語と日本語)の形態で出版されたことである。

姫本由美子は、雑誌『ジャワ・バル』に対して、識字率が当時6パーセントにすぎなかったジャワで、本誌は魅力的な雑誌だったと指摘しながら、徴用作家武田麟太郎の重大な役割を述べている²。また、本誌は、インドネシア国民に対する日本軍政の宣伝の一つの手段であったにしても、若手インドネシア人作家に活躍の場を提供したというのが姫本の主張である。確かに、アルミン・パネ、HBヤシン、ロシハン・アンワール、ウスマル・イスマイル、ロシ・タニなど多くのインドネシアの若手作家たちが本誌に関わっていることは否定できない。このような事実、いわば宣伝部との協力についてヤシンは、「力と精神は一つになって、(国家のため)現在において、将来においてきっと役に立つ」ということを記述している³。このように日本軍政下に出版された雑誌、主に『ジャワ・バル』は、インドネシアの若手作家にとって、彼らの知識を生かしなが

¹ Niranjana, T. *Siting Translation : History, Post-structuralism, and the Colonial Context*. Berkeley : University of California Press, 1992, p.2.

² 姫本由美子「日本占領下のインドネシアをめぐる報道と宣伝のはざまで—朝日新聞社所蔵写真を手掛かりに—」(『アジア太平洋研究』28号, 2017), p.290.

³ HB Jassin, *Kesusastran Indonesia di Masa Jepang*. Jakarta : Pustaka Jaya, 2013, p.11.

ら活躍できる場として活用されていたとヤシンと姫本がすでに指摘した。しかし、インドネシア語でしか書かれていない雑誌『パンジ・プスタカ』の場合はどうなったのか。

本研究では、日本軍政下に出版された雑誌『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』における日本文学作品の翻訳を中心にして、その作品の特徴と性格を再確認する試みである。また、両誌に掲載された日本文学作品とインドネシア文学作品の翻訳は、読者にとってどのような意義を持っているのかを明らかにしたい試みである。

2 雑誌『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』に掲載された日本文学作品

雑誌『パンジ・プスタカ』(原文：Pandji Poestaka、意味：図書の旗)は、1901年にオランダ政府が植民地の蘭領東印度(インドネシア)に対して始めた「Ethische Politiek」(倫理政策)の一環として、1922年から1945年までBalai Poestaka(国民図書局)によって、発行された一般向けマレー語(のちにインドネシア語と呼ばれる)の雑誌である。最初は週刊誌として発行されたが、のちに隔週発行されるようになった。本誌の発行の主な目的は、国民に良質の読み物を提供することで、文学作品、社会文化に関する記事、海外の事情などが掲載されている。名著マラー・ルスリ(Marah Roesli)『シティ・ヌルパヤ(Siti Noerbaja)』、アブドゥル・ムイス(Abdoel Moeis)『サラ・アスハン(Salah Asoehan)』、スタン・タクディル・アリシャーバナ(Sutan Takdir Alisjahbana)『ディアン・ヤン・タク・クンジュン・パダム(Dian jang tak Koenjoeng Padam)』などが、本誌に最初に連載されたのである。

日本軍が1942年にジャワに入った時、一ヶ月ほど休刊されたが、1942年4月11日XX年1号に、日本軍政宣伝部の指導のもとで生まれ変わった。日本軍政のプロパガンダと戦争情勢の記事の他に、文学、社会文化というような記事がそのまま残っている。しかし、言うまでもなく、内容は日本軍政に規制されている。

他方、雑誌『ジャワ・バル』(原文：Djawa Baroe、意味：新しいジャワ)は、1943年から1945年まで日本軍政の指導を受けながら国民図書局によって発行された新雑誌である。本誌は、ジャワ新聞社とインドネシア語の新聞『アジア・ラヤ(Asia Raja)』の協力で創刊されたものである。いわば、新聞『アジア・ラヤ』と雑誌『ジャワ・バル』に関わっている人たちはほとんど一緒と考えられる。『ジャワ・バル』の創刊目的は、現地のインドネシア人及び駐在日本人が同時に軍政からの情報を受けられるように二ヶ国語(二重語)という形で発行されたという。たいていの内容は、軍政の政策、海外戦争の情勢、生活知識情報、文化、文学などである。その中には漫画も載せられてい。

雑誌『ジャワ・バル』の社長及び編集長は、宣伝部に所属している日本人だが⁴、その

4 鈴木文四郎(1942年10月8日-1943年5月1日、初代社長で、『ジャワ新聞』と『ジャワバル』を創刊)、野村秀雄

もとでのちに独立運動に大いに活躍したサヌシ・パネ(Sanusi Pane)をはじめ、HBヤシン(HB Jassin)、ロシハン・アンワール(Rosihan Anwar)、など大勢の若きインドネシアの知識人たちがいた。本誌に掲載された文学作品は主としてインドネシアの文学作品であるが、ある時期に日本文学作品も掲載された。なお、両誌における日本文学作品の数は以下の【表1】と【表2】に述べている。

【表1】両誌における短編小説の数

雑誌名(発行期間)	インドネシアの短編小説	日本の短編小説	注
Pandji Poestaka 2602(西暦1942)年4月11日-2605 (西暦1945)年3月15日	32 連載小説も含む	1	2602年4月11日-2603年 3月20日、週刊誌だった が、その後隔週発行
Djawa Baroe 2603(西暦1943)年1月1日-2605 (西暦1945)年8月1日)	16 連載小説も含む	5短編小説及び演劇 2辻小説	隔週発行

3 戦時下の文学作品翻訳の特徴及び性格

(ア)テーマと内容

戦時下における文学作品の掲載の一つの目的としては、軍政のプロパガンダが文学作品を通じて、大勢の人たち、主に教育のある人たちの心をつかむためであることは、研究者たちがすでに指摘した。しかし、当時様々なメディアに掲載された文学作品は全部必ずしも、プロパガンダの匂いがあるわけではない。特に、インドネシア文学作品に於いて、幅広いテーマが見られた。例えば、お見合いに反対した若い人たちの恋愛、多忙なお医者さんの家庭事情、怠ける人など、日常的なテーマも多く見られた⁵。

しかし、雑誌『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』に掲載された日本文学作品翻訳に限って、すべてのテーマはプロパガンダ的なものであることは否定できない。これについて以下の【表2】に表している。

(2代目、1943年5月1日-1944年6月2日)、東口真平(3代目、1944年6月26日-1945年7月13日、益田豊彦(1945年7月13日-9月2日、4代目)(姫本由美子「日本占領下のインドネシアをめぐる報道と宣伝のはざま—朝日新聞社所蔵写真を手掛かりに—」(『アジア太平洋研究』28号、2017)、p.272によるもの)

⁵ Widodo Djati, *Antologi Cerita Pendek Indonesia Modern pada Zaman Jepang dalam Majalah Panji Pustaka*. Jakarta : Depdikbud, 1995, p.2.

【表2】テーマ別日本文学作品翻訳

順	タイトル・発表年	テーマ・内容
1	Poetera Persik (Iwaya Sazanami) 「桃太郎」巖谷小波(翻訳者及び編集者 HB Jassin)・『パンジ・プスタカ』2603年(西暦1943年)4月(日にち不明)連載	戦い、正義・鬼ヶ島の鬼たちを退治しに行く桃太郎
2	Kitjizo ke Medan Perang (Hino Joshihei) 「軍馬吉蔵の出征」火野葦兵(翻訳者及び編集者Rosihan Anwar)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)1月1日(1号)	戦争・最愛の馬を国のために出征
3	Ditempat Asoehan Garoeda (Niwa Fumio) 「海鷲揺籃地にて」丹羽文雄(翻訳者及び編集者Rosi・Tani)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)1月15日(2号)	戦争・ある飛行士の死生観と戦争体験の語り
4	Batoe (Kawai Tetsukichi/ Shimizu Minoru) 「石」河合哲吉/清水実(翻訳者及び編集者Rositani)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)2月1日(3号)	戦争、自信を生み出す・自信が消えそうな兵隊に硬い「石」のように、自信
5	Pradjoeit Nogikoe (Kikuchi Kan) 「野菊の兵士」菊池寛(翻訳者及び編集者 Rositani)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)2月15日(4号)	戦争・戦場での兵士と東京の娘との手紙やりとり
6	Perkawinan 25 Tahoen (Sasaki Takamaru) 「銀婚式」佐々木孝丸(翻訳者及び編集者 不明)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)3月1日(5号)と同年3月15日(6号)連載	戦争・ジャワ駐在している父と離れたある東京の家族
7	辻小説：Torpedo (Inoue Tomoichiro), Ibu (Akiyama Rokurobei) 「魚雷」井上友一郎、「母」(秋山六郎兵衛)(翻訳者及び編集者 不明)・『ジャワ・バル』2604年(西暦1944年)4月1日(7号)	戦争、親孝行

【表2】にも表しているように、両誌における日本文学作品の主なテーマは戦争と関わっていることが明らかになった。これは、読者の戦争実態の意識を保つためだけでなく、正義の味方としての日本軍への支援を求めるためであると考えられる。特に、佐々木孝丸「銀婚式」では、母そのが、東京の病院で助産師の知識を深める主な理由が、ジャワの農村に暮らしている妊婦たちを助けるためであることを強調することで、インドネシア人の読者たちの同情或いは関心を買うねらいがあったと考えられる。

(イ)翻訳者及び翻訳方法

インドネシア、この場合ジャワに派遣された宣伝班の人たちの中、文学者たちだけではなく、思想家、画家、カメラマン、通訳者などがいたということは木村一信がすでに指摘した⁶。その中で、宣伝班に所属して、いち早くインドネシア語による新聞『アジア・ラヤ(Asia Raja)』に勤務する翻訳の担当者中谷義男と市来龍夫がいた⁷。翻訳者の数

⁶ 木村一信「解説」『南方徴用作家叢書』ジャワ篇(竜溪書舎、1996)、p.17.

⁷ 木村一信『昭和作家の南洋行』(世界思想社、2004)、p.148.

は少なかったその任務先は一ヶ所だけではなかった。新聞『アジア・ラヤ』の編集者たちは次に設立された雑誌『ジャワ・バル』にも大いに関わっていた。

通訳者の市来龍夫は、一時的に『アジア・ラヤ』の編集委員長として関与したが、のちに名前だけが残った⁸。しかし、ここでもっとも興味深い人物は中谷義男というもう一人の通訳者及び翻訳者である。南方徴用作家の富沢有為男(1902-1970)は、『ジャワ文化戦』(1943)の中で、通訳者の中谷義男について次のような思い出を語っている。

「通訳の中谷義男と云ふのはどう云ふ人間であるかと云うと、彼は大谷光瑞師の弟子なんです。小さい時から非常な秀才であつたが、家が貧しかった。あの当時大谷光瑞と云ふ人はかう云ふ貧家の秀才を集めたものですが、それが妙な教育方法をやつた。それをみんな百姓にしたり、雑貨家の小僧にしたりして、南進論を三十年を續けて居る譯ですが、あれだけ秀才を集めて置きながら、名聲ある人間が今日迄出てゐない。(中略)中谷はマランで雑貨商ををして居りましたね。これが四五年前から段々世界の様子見て居るとおかしくなつてきた。これは愈々本物のマライ語を勉強して置かなければならぬと直感した。(中略)非常に頭もいいのだが、性質が非常にいい。この人は単なる通訳ぢやない。浅野君なんかも、この前文芸春秋の座談會で、さう云ふことを言つて云つたが、非常な情熱と愛情を以てインドネシアに對した。」(富沢、1943：145-146頁)

このように、宣伝班の文学者たちは、通訳者の中谷義男の実力と人柄に関心を持ち、彼に信頼を託したということがわかった。また、それだけではなく、富沢によると中谷も多くのインドネシア人たちからの信頼を受けた述べ、インドネシア人でさえ彼のインドネシア語の能力を認めたと書いている⁹。

次は、日本語からインドネシア語に訳すときにどのような作業が行われたかについて検討してみたい。確かに中谷のマレー語(インドネシア語)の能力は優れたと言われたが、新聞『アジア・ラヤ』と雑誌『ジャワ・バル』の翻訳作業は一人するのは、無理だと思われる。そこで、インドネシア人の助手が必要だったと推測される。具体的な作業の情報ははっきりわからないが、おそらく、中谷が作った下書きをインドネシア人の助手たちに渡して、最後に彼らによって正確なインドネシア語に書き直したというプロセスだと思う。

中谷の助手たちは、かなり学歴の高い若い人たちである。その中には、「【表2】テーマ別日本文学作品翻訳」にあるように、例えば、HBヤシン(1917-2000)、ロシハン・アンワール(1922-2011)、とロシタニ(不明)がいた。雑誌『ジャワ・バル』に掲載された日本文学作品翻訳を検討してみると、ほとんどの文学作品の末尾に「Disoesoen oleh :」

⁸ 丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌曲募集——《八重潮》の成立に着目して——」(『立命館平和研究第18号』, 2017), p.8.

⁹ 「スカルヂヨさんかも、『自分よりは中谷の方がマライ語がうまい』と云つて居るのです。」(富沢有為男『ジャワ文化戦』日本文林社, 1943), p.146.

という言葉があり、日本語に訳すと「〇〇に編纂又は編集された」という意味である。他方、雑誌『パンジ・プスタカ』に掲載された「ももたろう」の場合は、「Salinan H.B.J」という言葉があり、日本語に訳せば、「H.B.Jの写し」という意味になる¹⁰。どれも「翻訳者は〇〇」という言葉が書いてなかった。このようなことを考えると、インドネシア人の助手たちの役割は翻訳者ではなく、編纂者或いは編集者であることが明らかになった。

そして、翻訳或いは編集の仕方(方法)についてどのように行われたかについて検討してみたい。まず、日本語の原文からインドネシア語に翻訳されたときに、省いた部分が多くあるという特徴がよく見られた。例えば、雑誌『パンジ・プスタカ』に掲載された巖谷小波「ももたろう」には、下記のような原文は、インドネシア語に翻訳されなかった。

「時は丁度夏の初旬。堤の草は緑色の褥を敷いた如く、岸の柳は藍染めの総を垂らした様に、四方の景色は青々として、誠に目も覚める斗り。折々そよそよと吹く涼風は、水の面に細波を立たせながら、其余りで横顔を撫でる塩梅、実に何とも云はれない心地です。」(巖谷、昭和52年：p.94)

上記の引用文の内容を考えると、状況或いは風景の説明であり、ほとんど物語の内容には直接関係がない。おそらくその理由で、編集者は、その部分を排除したと考えられる。そして、細かいところではあるが、以下の引用文にも同様に細かく翻訳されない部分がある。

「猿は両手をつかへて「ハッ、私事は此山に住居致す、『ましら』と申す獣に御座ります。此度桃太郎様、鬼か島御征伐の事仄に承はり、是非とも御供仕らんと、推参致して御座ります。」(巖谷、1977年：p.94)

Si kera meletakkan kedoea belah tangannja dengan hormatnja di atas tanah, seraja berkata : "hambalah Si Kera digoenoeng ini. Ketika hamba dengar toeanhamba sedang dalam perdjalanen hendak menaloekkan Poelau Setan, maka hambapoen telah berniat akan menoeroetkan toeanhamba, itoepoen djika sekiranja toeanhamba tiada keberatan akan maksoed hamba itoe" (Iwaya Sazanami "Poetera Persik (Momotaro) Pandji Poestaka, 2603(1943) : p.647)

上記の原文と翻訳文に見られるように、著者は「猿」と「ましら」が同じ意味にも関わらず、それぞれの目的に使用されている。しかし、インドネシア語訳には、一つの単語「Kera」にしか翻訳されなかったという¹¹。

¹⁰ H.B.JはHans Bague Jassinの略である。

¹¹ インドネシア語では、尻尾のない猿はkeraというが、しっぽのある猿はmonyetという。「ももたろう」に登場した猿は、どのような「猿」かインドネシア人にとって把握しにくい。

このような簡略或いは省き傾向は『ジャワ・バル』誌に掲載された短編小説の翻訳にもみられている。それは下線のある部分からわかる。

(第へ十月二十八日〇〇丸にて)

今日も私達のまはりに、森々と青い空と、森々と青い海とがある。それは昨日も、一昨日も、一昨々日も、一昨々々日も、あつたと同じ変らぬ青さで、そこにある。(火野葦兵、2604(1944) : p.27)

Adikkoe!

Hari inipoen disekitar diri kami ta'ada oebahnja dengan kemarin, ja dengan hari-hari jang doeloe. Semoeanja biroe-biroe. Diatas kami melengkoeng langit jang biroe dan keliling kami membentang laoet jang biroe poela.(Hino, 2604(1944) : p.27)

上記の「軍馬吉蔵の出征」の引用文からみると、日付と場所がインドネシア語に翻訳されなかったことがわかった。文字数としては長くないが、なぜ翻訳されなかったのか疑問に思う。むしろ、翻訳した方が読者たちが船の中の雰囲気が想像できると考えられる。このような傾向も、次の短編「野菊の兵士」と演劇「銀婚式」にもみられる。

色が黒いので、エチオピアのピアだけ取つて、ピア子と仇名のついた妹の君子が、勤先の本所の軍需工場から、もう帰つてゐて、小さい食卓には、御馳走が並んでゐた。(菊池寛、2604(1944) : p.28)

Adiknja Kimiko jang bergelar "Piako", karena moekanja jang kehitaman itoe mengingatkan orang kepada negeri Ethiopia, soedah lebih dahoele poelang keroemah dari tempat pekerdjaannja, seboeah paberik sendjata di Hondjo. Diatas medja ketjil soedah terpapar makanan. (Kikuchi, 2604 (1944) : p.27)

舞台は、原宿辺にある碧川母子の住居を庭の方から見たところ。昭和十七年三月二日の午頃。柴山彦一が、一人ぼつねんと碧川に腰かけて煙草をのんでゐる。(佐々木孝丸、2604(1944) : p.27)

Pangoeng meroepakan seboeah tempat kediaman jang dilihat dari djoeroesan pekarangan. Letaknja kira-kira di Haradjoekoe di Tokio, soeatoe djalan jang dipinggiri oleh banjak roemah-roemah bagoes, dekat kepada stadion Meidji. Waktoenja kira² siang hari, pada tg. 2 Maret th.2602. Hikoiitji Sjibajama doedoek seorang diri, sedang merokok.(Sasaki, 2604 (1944) : p.27)

上記の引用文を詳しく見ると、原文「エチオピアのピアだけ取って」、「碧川母子」、「碧川」という単語があるのに、翻訳文には書かれていない。そして、場所を説明するとき

に、原文には「原宿辺」と書かれてあるが、翻訳文にはHaradjoeckoe(原宿)と書いてあるが、その他にTokio(東京)とStadion Meidji(明治スタジアム)までも書かれてある。翻訳者は、インドネシア人の読者たちに詳しく説明する試みが見られるが、ほとんど日本へ行ったことのないインドネシア人読者たちは不必要ではないかと思う。逆に、舞台は誰の家なのかについて、インドネシア語に訳されなかった。

しかし、逆に、日本語原文の省きも以下の短編「海鷲揺籃地にて」に見られる。

任務のことを思ふと死ねませんからね。死よりも任務のことを足元の印度洋が少しづつ怖くなってきました」ところが、そしらぬ顔をして収めてはくれないのです。自分の機はたうとう動かなくなりました。(丹羽文雄、2604(1944)：p.30)

Kalau soedah begitoe tidak gampang akan mati. Boekankah begitoe Toean, kalau kewadajiban jang dipikirkan saja tidak dapat mati. Maka kalau memberatkan kewadajiban daripada mati, lambat laoen menjadi takutlah saja ketika itoe kepada laoetan Hindia jang ada dibawah kaki saja...” Ema sedjoeroes telah terhenti napasnja oentoek meresapkan kesan jang baroe diperolehnja itoe, jang tidak bisa diterimanja begitoe sadja.(Niwa, 2604(1944)：p.29)

文章「怖くなってきました」と「ところが」の間に、省いた部分がある。しかし、インドネシア語の訳には、その省いた部分が翻訳された。つまり、日本語にはない部分がインドネシア語にはあることがわかった。理由は不明だが、可能性として二つある。それは、編集のミスか、スペースが不十分の理由で省いたと考えられる。

(ウ)同情と共感の狙い

日本文学作品の掲載には、日本軍政のプロパガンダとしての特色が濃いことについて上述した。しかし、両誌に掲載された7つの作品の中、最も関心深い作品は「銀婚式」である。本作品の話の内容は東京に住む、ジャワ開拓者であった日本人家族についてである。戦前、夫と妻はジャワへ行って、開拓しながら家庭を築く、子供4人に恵まれた。太平洋戦争が起きる前、妻と子供たちは日本に引き揚げさせ、夫だけがジャワに残った。妻と長男は、東京にいる間、知識を身に付け、戦争が終わったら、ジャワに戻るつもりという話である。

このような話は、ほかの作品と比べたら、インドネシア人にとって共感しやすいと考えられる。ジャワ更紗やサロンやジャワでの思い出などというようなものの登場は、非常にわかりやすくインドネシア人に受け入れやすい。その他に以下の引用文からインドネシア人にとって感動的だと思う。

「お母さんは、ジャワの奥地で役立てるために医者技術を学んだんだぞ。……そらお産だといつても産婆らしい産婆は一人もゐない、たまたま難産だとなつても、大都会へ出なければ医者を迎へることができない、さういふ不便な奥地で働いてゐる人たちのために、いや母さん自身、身を似てさういふ体験をして来てゐるために、今度ジャワへ渡つたらばと、それで産婆の技術も学び、女医の資格をもつたのだ、俺は、いつか母さんから、そのことを必々いつて聞かされたことがある。母さんの志は仲々どうして遠大なものなんだ。」(佐々木孝丸、2604(1944)：p.31)

Maksud Iboe beladjar, nanti soepaja bergoena didesa-desa di Djawa…… Disitoe kalau orang beranak sekonjong-konjong disekitarnja tidak ada bidan jang pintar. Apalagi kalau kebetoelan timboel kesolitan beranak, tidak bisa panggil dokter, ketjoeali kalau pergi kekota besar. Iboe sendiri soedah banjak melihat jang sematjam itoe, laloe beladjar mendawat anak, sampai mendapat pengesahan djoega sebagai dokter perempoean. Nanti kalau kembali ke Djawa akan dapat dipenoehi kekoerangan itoe. Doeloe pernah iboe bertjerita. Wah, tjita² iboe boekan main tinggi sekali.(Sasaki Takamaru, 2604(1944)：p.31)

このように、次男の次郎に対して「お母さんは、ジャワの奥地で役立てるために医者技術を学んだんだぞ」という長男の一郎の説得力が強くて、当時のインドネシア人にとっても共感できる言葉だと考える。

3 異文化交流の一環としての「文学」

戦時下に発行された雑誌の中で掲載された両国(インドネシアと日本)の文化、思想、文学などの主な目的がプロパガンダであることは先述した。しかし、日本軍政はなぜ雑誌『ジャワ・バル』のように二重語のメディアを発行したのか。少なくとも考えられる理由は二つある。それは、まず、インドネシア駐在軍政関係の日本人とインドネシア人に同時に情報提供できるためである。そして、様々な記事を通じて両国の社会、文化、政治事情もわかる。

特に、文学作品翻訳の場合、インドネシアにはない日本文学のジャンルを紹介することもできる。例えば、「辻小説」を紹介するときに、編集者は以下のように述べている。

「こゝに掲げた辻小説は前線将士の勇戦奮闘に感謝するとともに、その成果に●へて日本文学報告会小説部の手によつて生まれたもので、会員全部が一枚の原稿用紙(四百字詰)に小説、檄文を筆し●●に発表したものである。(編集者、2604(1944)：p.30)

上記の文章をインドネシア語に翻訳したときに、編集者は「辻小説」を「KISSAH SEPANDJANG DJALAN」と名を付け、「このような小説の種類は、インドネシア文学界にはまだ知られていない」と付け加えた。それだけではなく、日本とインドネシアの文学作品の区別(大人用と子供用)は異なっていることがここで分かるようになった。例えば、雑誌『パンジ・プスタカ』に掲載された「ももたろう」は、大人の読み物として扱われた。インドネシアでは、「ももたろう」のような物語は、昔話の区分に入って、一般大人用の文学よりも「児童文学」に入っている。そして、同様に雑誌『ジャワ・バル』に掲載された「軍馬吉蔵の出征」は、インドネシアの場合は児童文学に区別され、子供用のページに載せるべきものだった。このような、異なる価値観は、当時のインドネシア人にとって、新しい体験だったと思う。

一方、二重語雑誌のおかげで、『ジャワ・バル』に掲載された日本語訳のインドネシア文学作品を通じて、日本人読者たちも現地の生活事情、文学者たちの考え方(思想)を読むことができたと思う。原住民の考え方を理解することは、異国との交流の第一歩となる。【表1】にあるように、雑誌『ジャワ・バル』に掲載されたインドネシア文学作品は16タイトルがあり、日本文学作品より多い。その一つの作品はウスマル・イスマイル(Usmar Ismail)の作品「白帆」(Lajar Poetih)である。どのように翻訳されたのかについて以下の引用文からみてみたい。

Ida terdiam doedoek didepan djendela. Dengan ta' sengadja ia ikoet memoekoel rintik hoejan diatas kerikil. Ah soedah kemasoekan penjakit Bidin poela, dengan seni soeara laoetnja. Tadi pagi Ida ke pinggir laoet bersama seorang teman. Moela-moela ia agak enggan ikoet. Ia bentji kepada air asin itoe. Laoet saingannya pertama. Lawannja kedoea ialah Bidin sendiri, Bidin dengan semangatnja jang toeroen naik seperti padang. Tapi achirnja ia ikoet djuga. Ida dan temannja doedoek diatas tikar roempoet jang hidjau, memandang kelaoet lepas. (Ismail, 2604(1944) : p.27)

イダは一人黙つて窓の下に着て座っていた。彼女は無意識に庭の砂利に落ちる雨の音に拍子を取つてゐた。あゝ妾にも海の音を音楽と聞く。ビデインの病気が傳染つたのかしら。イダとビデインは長い許婚時代を経て太平洋に爆弾が驚きはじめるころ結婚したのだつた。(イスマイル、2604(1944) : p.27)

上記の作品は、雑誌『ジャワ・バル』2604(1944)年4月1日7号に掲載されたものである。翻訳者が不明だが、翻訳の特徴としては他作品と同様に、部分的に文章が省かれていることが挙げられる。例えば、上記の引用文の下線部のインドネシア語文章の「Tadi pagi Ida…」から後の部分は翻訳されなかった。下線部の日本語文章「イダとビデインは」に続く部分は、上記のインドネシア語の訳ではなく、その次の別のところの翻訳である。

このように、日本文学作品翻訳だけではなく、インドネシア文学作品の翻訳にも似たような問題が起きていた。なぜ、作品を完全に翻訳されなかったのか。その理由は、戦時中の緊急事態にあったからだと思う。限られている資源の中、なるべくたくさんの情報を国民に提供するのは当時の日本軍政の政策の一つだった。しかし、作品が部分的に消されても、作家たちが伝えたいメッセージが消されずに、読者たちの心まで届くことが最も大事なところだと考える。このように、インドネシア人の読者がインドネシア語で日本文学を味わうことができると同時に日本人の読者が日本語でインドネシア文学を読むことが出来たことは、改めて翻訳者及び編集者の重要な役割を思い起させてくれる。また、『ジャワ・バル』のような二重語の雑誌、特に二重語の文学作品を通じて、両国の「異文化交流」という場がすでにできたのではないかと考えられる。

【図1】『パンジ・ブスタカ』1943年6月1日

【図2】『ジャワ・バル』1944年1月15日

【図3】丹羽文雄「海鷲搖籃地にて」

【図4】ウスマル・イスマイル「白帆」

4 おわりに

太平洋戦争中に於ける日本文学作品の紹介の主な目的は、ほとんどの研究者たち、特にインドネシアでは、言うまでもなく日本軍政のプロパガンダであったと認知されている¹²。しかし、実際には重要な意義を持っている。本研究では、主な資料として用いた雑誌『パンジ・プスタカ』及び『ジャワ・バル』に掲載された日本文学作品翻訳を考察した結果、いくつかの興味深い点が明確になった。

雑誌『パンジ・プスタカ』の場合、日本文学作品が一つしかインドネシア語に翻訳されなかった。なぜこの作品がインドネシア人の読者たちに読んでもらいたかったのか、その理由ははっきりわからないが、動物の世界をたとえにして、日本と東南アジア諸国が団結して、西洋諸国(鬼たち)を退治することが、インドネシア人の読者たちに通じる話ではないかと考えられる。他方、雑誌『ジャワ・バル』の場合は、二重語の雑誌として、両国民が両国の文学作品を味わうことが出来ることに大変重要な意義があったと考えられる。

また、作品の数及び質、そして翻訳の方法などにいくつかの問題があるが、物語の流れ及び内容としては、ほとんど問題はないと思う。読者に作者の気持ちが伝わることは最も大事なところだと思う。さらに、戦争という悲しい状況の中、両国の文学作品の翻訳という作業を通じて、日本とインドネシアの文学者たち(この場合編集者たち)の交流の場を与えただけでなく、両国の読者たちに異文化交流を促すことが出来た点にも、焦点を当てなければならないと執筆者は考える。

最後に、本研究では十分に考察できなかったが、発見された通訳者及び翻訳者中谷義男の背景と助手たちの仕事のやり取りも、とても興味深い。また、実際に日本人とインドネシア人の読者たちが両国の文学作品翻訳を読んでどういう風に受け入れたのか検討できなかったが、それは今後の研究課題にしたいと思う。

参考文献(Bibliography)

- 巖谷小波(1977)『日本児童文学大系1』, 東京: ほるぷ出版. Iwaya, Sazanami(1977) *Nihon Jidou Bungaku Taikai 1*. Tokyo: Horupu Shuppan.
- 音谷健郎(2004)『文学の力—戦争の傷痕を追って』, 東京: 人文書院. Otodani, Tatsuo(2004) *Bungaku no Chikara—Sensou no Kizuato wo outte*. Tokyo: Jinbun Shoin.

¹² 例えば、Widodo Djati(1995) *Antologi Cerita Pendek Indonesia Modern pada Zaman Jepang dalam Majalah Panji Pustaka*. Jakarta: Depdikbud(日本占領時代の雑誌『パンジ・プスタカ』に収録されたインドネシア短編集). Yundi Fitriah(1997) *Propaganda Jepang dalam cerpen-cerpen majalah Djawa Baroe*(Thesis S2), Universitas Indonesia(雑誌『ジャワ・バル』の短編小説における日本のプロパガンダ、修士論文、インドネシア大学). 音谷健郎『文学の力—戦争の傷痕を追って』(東京: 人文書院, 2004)、五味潤典嗣『プロパガンダの文学—日中戦争下の表現者たち』(東京: 共和国, 2018)などがある。

- Jassin HB (2013) *Kesusastraan Indonesia di Masa Jepang*. Jakarta : Pustaka Jaya.
- 木村一信 (1996) 『南方徴用作家叢書・[ジャワ篇]』解説. 東京：竜溪書舎. Kimura, Kazuaki (1996) *Nanpou Chouyou Sakka Sousho (Jawa-hen) kaisetsu*. Tokyo : Ryuukei Shosha.
- 木村一信 (2004) 『昭和作家の(南洋行)』, 東京：世界思想社. Kimura, Kazuaki (2004) *Showa Sakka no (Nanyou-yuki)*. Tokyo : Sekai Shisousha.
- 五味潤典嗣 (2018) 『プロパガンダの文学—日中戦争下の表現者たち』, 東京：共和国. Gomibuchi, Noritsugu (2018) *Puropaganda no Bungaku—Nicchuu Sensouka no Hyougenshatachi*. Tokyo : Kyouwakoku.
- 富沢有為男 (1943) 『ジャワ文化戦』, 東京：日本文林社. Tomisawa, Uio (1943) *Jawa Bunkasen*. Tokyo : Nihon Bunninsha.
- Niranjana, T. (1992) *Siting Translation : History, Post-structuralism, and the Colonial Context*. Berkeley : University of California Press.
- Widodo Djati (1995) *Antologi Cerita Pendek Indonesia Modern pada Zaman Jepang dalam Majalah Panji Pustaka*. Jakarta : Depdikbud.
- 姫本由美子 (2017) 「日本占領下のインドネシアをめぐる『報道』と『宣伝』のはざまで—朝日新聞社所蔵写真を手掛かりに—」『アジア太平洋研究』28号, pp.272-290. Himemoto, Yumiko (2017) *Nihon Senryoka no Indonesia wo Meguru Hodou to Senden no Hasama de—Asahi Shimbunsha Shozou shashin wo Tegakari ni—Aija Taiheiyou Toukyuu No. 28, pp.272-290.*
- 丸山彩、織田康孝 (2017) 「日本軍政下のジャワにおける歌曲募集——《八重潮》の成立に着目して——」『立命館平和研究』第18号, 京都：立命館大学, p.8. Maruyama Aya, Oda Yasutaka (2017) *Nihon Gunseika no Jawa ni Okeru Kakyoku Boshuu—(Yaeshio) no Seiritsu ni Chakumoku shite—, Ritsumeikan Heiwa Kenkyu No.18*. Kyoto : Ritsumeikan Daigaku, p.8.

雑誌(グラフ誌)

- Poetera Persik (Momotaro) *Pandji Poestaka*, 2603.4. (日にち不明)
- Poetera Persik (Momotaro) II *Pandji Poestaka*, 2603.4.
- Kitjizo ke Medan Perang *Djawa Baroe* 2604. 1. 1.
- Ditempat Asoehan Garoeda *Djawa Baroe*, 2604. 1. 15.
- Batoe *Djawa Baroe*, 2604. 2. 1.
- Pradjoerit Nogikoe *Djawa Baroe*, 2604. 2. 15.
- Perkawinan 25 Tahoen *Djawa Baroe* 2604. 3. 15.
- Torpedo/Ibu *Djawa Baroe*, 2604. 4. 1.

インターネット

- Ensiklopedia Sastra Indonesia. Pandji Poestaka (1922-1945).Kemdikbud. Acces date : 2020.11.9.
<http://ensiklopedia.kemdikbud.go.id/sastra/artikel/Pandji_Poestaka>
- Ensiklopedia Sastra Indonesia. Djawa Baroe (1943-1945).Kemdikbud. Acces date : 2020.11.9.
<http://ensiklopedia.kemdikbud.go.id/sastra/artikel/Djawa_Baroe>
- Ensiklopedia Sastra Indonesia. Daftar Pengarang.Kemdikbud. Acces date : 2020.11.9.
<<http://ensiklopedia.kemdikbud.go.id/sastra/kategori/Pengarang>>